

文学館だより

令和5年 1月 1日
若山牧水記念文学館
TEL 0982-68-9511
文責 日高

あけましておめでとうございます

「戦」で象徴された令和4年が幕を下ろし、令和5年が幕を開けました
皆さまにとって幸あふるる年でありますようご祈念申し上げます
今年は牧水没後95年

牧水先生を慕い、牧水生誕の地に誇りをもち、今年も全国へ牧水先生
の魅力を発信してまいります



本年度の主な企画事業

第10回高森文夫を偲ぶ詩大会表彰式	1/22(日) 9:30 ~ 10:30	若山牧水記念文学館
企画展『若山牧水賞』	2/26(日)まで	若山牧水記念文学館
ギャラリー企画展『牧水母校作品展』	2/1(水) ~ 3/31(金)	若山牧水記念文学館
企画展『榎倉香邨遺作展』	3/5(日) ~ 4/30(日)	若山牧水記念文学館
鼎談『牧水と書家榎倉香邨を偲ぶ』	3/21(水) 13:30 ~ 15:30	牧水公園ふるさとの家

企画展 「第27回 若山牧水賞」 歴代受賞者勢ぞろい



展示風景

第27回若山牧水賞が発表され、当文学館企画展も衣替えです。中央ケースが奥田亡羊さんコーナーです。現在は写真パネルと受賞歌集『花』、直筆自選五首を展示しています。来館された日に歌集にサイン、色紙に1首書いていただき、展示ケースが賑やかになります。

壁面には歴代受賞者が勢ぞろいし、直筆自選五首と受賞歌集、色紙が並んでいます。昨年の受賞者黒瀬珂瀬（くろせからん）さんも歴代受賞者に並びました。



歴代受賞者の中には、NHK短歌第1週選者の栗木京子（くりききょうこ）さん、宮崎市在住で青の國若山牧水短歌大会選者の大口玲子（おおぐちりょうこ）さん、9月に宮崎を離れた俵万智（たわらまち）さんも並んでいます。

総勢31名を数える若山牧水賞受賞歌人たち。1年に一度、この時期でしか見ることのできない直筆自選五首を見に来られませんか。サイン入り歌集を手に取ってみませんか。2月26日（日）まで開催しています。



直筆自選五首 中央ケースにて展示

報告 若山牧水研修～牧水の人生、受け継がれる牧水～

昨年末、当館において牧水研修が行われました。

- (1) 見学
- (2) 旅の歌・酒の歌・自然の歌から牧水の人生に迫る
- (3) 受け継がれる牧水として、牧水関連行事を紹介
- (4) 質疑



○文学館に来たら牧水がわかる。

○「詠め」ないけれども「読む」ことはできる。関心をもった。

○文学かふるさとか紆余曲折ありながら初志貫徹する牧水に感じ入る。
などの感想をいただきました。今年の研修に「牧水」！いかがですか。

伊藤一彦短歌実作講座 力作そろう

歌詠み愛好家たちが集う伊藤一彦短歌実作講座（顕彰会主催）。講座生の中には、高校生から詠み始めた方、歌集を出版された方、宮日歌壇等に掲載される方々もおられ、私自身、毎回刺激を受けています。

伊藤先生からも「秀作ぞろいだった。」とのお言葉をいただきました。

今年度最後の講座とあり、今年投稿いただいた歌を作者ごとにまとめた手作り歌集を皆さんにお渡ししました。

～今回の作品より～

秋深し杖つきデビューまず一步明日に向かって転ばぬように

〈講評〉 ○前向きな印象を受けた。「秋深し」がよい。

○どこで切るのか、切れるのか・・・読者に任せよ。

秋深し／杖つきデビューまず一步／

秋深し／杖つきデビューまず一步明日に向かって／

廃屋に絡む蔓草色づきぬ秋は等しく訪れたるや

〈講評〉 ○「廃屋に絡む蔓草色づきぬ」・・・目線がよい。作者の発見。

○「訪れたるや」・・・「訪れてをる」とか「訪れたるか」だろうか。

「や」は終止形につく。連体形につくのは「か」。

点てんと咲きのぼり来ていただきにねじ花宙へいま翔ばむとす

〈講評〉 ○ねじ花をよくとらえている。

○「空」は高いところを表し、「宙」は空間を表す。

友に貰ひ庭に植ゑにし水仙は戦後の母の笑顔に咲く花

〈講評〉 ○表現が優れている・・・「戦後の母の笑顔に咲く花」がすばらしい。

牧水先生の一首

折に触れて出会う一首を紹介しています

年たちし十戸の村の曙を村に一つの鐘高う鳴る

明治36年1月1日の日記に書き添えられている。旧制延岡中学校4年生の冬休み、坪谷へ帰省している時に詠んだ歌。牧水17歳。

「村に一つの鐘」は、坪谷昌福寺の鐘をさす。この歌と並んでもう1首昌福寺の正月を詠んだ歌がある。

ただ一人新發意こまを遊びけり人里遠き寺の門松

牧水は、その後、随筆集『樹木とその葉』の中で「故郷の正月」を書いています。牧水が過ごした坪谷の正月を覗いてみましょう。

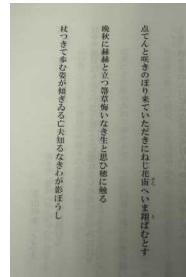
（略）今でもまだそうではないかと思いますが、村には新の正月と旧の正月とがあります。（略）新の元旦には母など一向に父を相手にしませんので、父は私を相手に「元日」の屠蘇を祝いました。他の者が平常着（ふだんぎ）なのに父と私とだけが紋附を着て、広い座敷に向い合って坐るのがいかにも変でした。

旧の正月はそれでも家中たいへんです。それに村ではすべての勘定事が盆と節季の二度勘定に決まっていますので、半年分の薬代を村の者がみな大晦日に持つて来ます。（略）

いつの正月であったか、珍しく雪の降った事がありました。私の七八歳の頃だったでしょう。我等子供はうろたえて戸外へ出て各自に大きく口を開けながらちらちらと落ちて来るその雪を飲み込もうとしたものです。そんなに雪は珍しいものでした。附近一の高山、尾鈴山というのの八合目ころから上にはのかに雪の積ることがありました。大抵は夜間に積むのですが、すると父は大騒ぎをして私を呼び起しました。

「繁、起けんか起けんか、尾鈴山に雪が降ったど、早う起けんと消えっしまうど！」と言ひながら。

その父が亡くなつてから十年たちました。頑健な母はまだ強情を張りながら、古びた家に唯一人残つております。私が学問をするために尋常科しかなかつたその村を出てから今年で丁度二十八年たつわけになります。



歌集より